

5月17日から始まった紙谷さんのお田植えは22日ごろにはひとまず7枚の田んぼを植え終わりました。大鹿村ではまだ機械植えた後に田んぼに入って補植するという作業が見受けられますが今は機械植えしつばなが多くなってきたようです。紙谷さんは丁寧に補植をされます。22日時点で25箱も苗が余ったとのことですがそれから1週間、田んぼのなかをくまなく歩き、ひと苗ひと苗に声をかけながらすべて補植完了！そして5月30日から待望の春蚕様を迎えさらにイキイキとお仕事をされています。1食ごとに大きく成長してゆくお蚕様は紙谷さんの愛情に応えるかのようです。春蚕の終盤は桑が足りなくなり近隣の村から桑を購入するという不本意な事態となりましたがそんな春蚕も6月28日、64キロの繭となり出荷されました。鹿ちゃんの食害は今年はかなり深刻化をしています。夏蚕は諦め秋蚕にかける紙谷さんです。



春先に大変お世話になった山菜「ヘナウド」の白い花が梅雨空に、爽やかさを添えてくれます。背が高く月夜にも映え、美しいシルエツトが魅力です。さてひと雨ひと雨、ますますみどり色が濃く、畑の雑草も勢いを増す大鹿村です。この季節お年を重ねた諸先輩方は「晴耕雨読」を実践されています。ただ「雨読」の所は個人差があり、「雨寝」だったり「雨遊」だったり「雨描」などそれぞれの「晴耕雨読」を楽しまれています。



6月11日現在



5月下旬



右馬允階段@5月初旬

緑のスピード

～ 石巻市被災地ボランティア活動報告 ～

5月24日から4泊5日で石巻市へ被災地ボランティアに参加させていただきましたので御報告させていただきます。私が被災地に向かったのはもうすぐ被災から3カ月を迎えるころ。痛ましい映像を見聞きするのにも慣れ始めている自分に疑問を感じていた。長期的な支援が必要とされている被災地に今後、どのような関わり方ができるのか、また文明への過信、無知がもたらした「天災+人災」。これらが投げかけた人類へのテーマ、社会の在り方など考える上でもインプットとアウトプットを整理しておきたかった。

●5月24日 朝5:00 大鹿村出発 初めての長距離運転
 長野自動車道 北陸自動車道 磐越道 東北自動車道 で宮城県入りするルート 午後6時過ぎ 石巻市 渡波 到着
 撤去されない津波の傷跡街を構成する色彩とにおい 災害の爪痕を色濃くかんじる。街の中心部から復興は進んでいるため少し郊外にすむとまだまだ撤去されないガレキの山。それでも人の手や重機などがは



2011
 水無月
 前志満くみ
 第24号

いり状況は好転している。本格的な夏にむけ下水の復旧が早期に求められるところ。大潮、大雨には冠水してしまうのも大きな課題という。その後ピースワーカーズと合流し、渡波の集いの場「明神社」にて炊き出しに参加。宮城の地鶏などが振舞われていた。午後9時ごろ活動拠点の表沢田集会所(石巻市市街地から20分くらい北に進んだところ)に到着。自己紹介、明日の打ち合わせなどをおこなう。

※被災地ボランティア受け入れ先「ピースワーカーズ」さんは、今回の東日本大震災をきっかけに 全てのつながる命の復興と再生を願う人々の間に自然発生的に生まれた個人の集まりで、現在も様々なこさしをもった方が集い、支援活動に当たられています。(HP参照peaceworkers.net)

●5月25日 朝7:00～ ボランティア集団(きずな)の活動報告会に参加

実に様々な団体が活動している。ニッポン財団、ピースボートは1週間単位、または週末に大型バスで人員を沢山送りこんでいる。専修大学のボランティアセンターにもがれき撤去を専門とする集団、福祉専門、炊き出し班など多くのチームが存在することを知る。ほんの数週間前までは物資を供給することや、がれきの撤去が主だった活動であったようだがボランティアの在り方が日に日に変わってゆく現状。とかくボランティアは被災状況を映像や報道で見聞きし、衝撃を受けて現地に意気込んで入ってくるが、被災された方の状況は様々。まだまだ将来に向けて動けない方、めどがつかない方などがある。ボランティアのスタンスがかえって被災者を傷つけることもある。そういえば、FM放送でもボランティアの心構えを頻りに放送しているのが印象的だった。地元の方とボランティアの温度差や距離感が今後難しい課題となってゆく。ただ与えればよいというボランティアではなく、現地の方の心とともに後押しする姿勢が大切ということを実感。

朝食後: 牡鹿半島 小淵地域にて 落語会の会場づくり。

牡鹿半島は入江ごとに集落が点在しカキの養殖が盛ん。(であった)各集落はほとんど津波の影響でがれきの山状態。中心地から復旧に手がつけられているため、漁村はこれから本格的な復旧作業が必要。牡蠣の養殖に使う「うき」は1万円くらいするため 沖に流されたモノや、がれきの山の中に埋ってしまったものも大切に回収している。カキの養殖を再建させようという心が伺える。ただ地形も大きく変化したようで、被災前ほどの豊かさ(海)を求められなくなった現状もある。落語は漁港の漁業組合の2階で。砂をはいたり、イスを並べたりと現地の方と一緒に作業にあたる。壁など津波の影響で大きく穴があいたりしているが大量旗で見えないようにしたりと、会場設置にこだわる。人生が大きく変わってしまったといわれる地元の方、そんな中でたのしみを見つけながら再建を目指している海やけした明るい笑顔が印象的であった。一部魚業も開始したとの一報もある。

午後: 渡波の民家の波いたはり 大工さんの補佐

壁が津波によって破壊され民家。家の土台をのこして家財は波に持って行かれたという状態。壁にかかった日めくりは3.11のまま。被災地の多くの方はこの日からまだ抜け出していない。これが現状だと感じた。今後も継続して住みたいという家主さんの要望にこたえ一時的ではあるが明るい日差しが入るように 透明な波いたをはりガラス窓がわりとする。大工仕事の楽しさを感じる。午前中の仕事が押したので今日中のできるか不安ではあったが、時間通り終了。早く終わったので「女川町」まで足をのばし視察。魚の腐ったにおいが立ち込め、大きく壊れ車がそこかしこに散乱。3・11以後復旧作業はほとんど進んでいないようだ高台にある病院の2階だけが機能している状態。ここから何を再建していくのか到底想像がつかない光景。人が住めるようになるのか...ただ祈る。